

| | |
|------------------|---|
| Title | リスク認知とメディア効果理論に関する一考察 |
| Sub Title | A study on risk perception and media effects theories |
| Author | 山本, 明(Yamamoto, Akashi) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 2000 |
| Jtitle | 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.51 (2000.), p.15- 21 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000051-0015 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リスク認知とメディア効果理論に関する一考察

A study on risk perception and media effects theories

山 本 明*
Akashi Yamamoto

Studies on mass media and risk have not fully examined the connection between risk perception and mass communication theories. The purpose of this paper is to review studies on mass media and risk perception and clarify the meanings of the term 'risk perception' in mass communication research, and to examine how risk perception is related to media effects theories. This work revealed that risk perception research is closely connected with media effects research, especially with cultivation analysis and third-person effect research. Risk perception research might have some contribution to the development and refinement of mass communication research.

1. はじめに

近年「リスク (risk)」に対する社会的関心が高まりを見せている (加藤・才津, 1997)。また、リスクをどのように伝えるのか、またリスクのある問題についていかにして社会的合意を得るかという、リスク・コミュニケーション研究の重要性の高まりも指摘されており (吉川, 1999)、リスクは社会問題としても、研究対象としても、重要な問題として認識されるようになってきた。

マスメディアが人々のリスク認知 (risk perception) に影響を与える重要な要因の一つであるということは、これまでも指摘されかつ立証されてきている¹。しかし、マスメディアが人々のリスク認知に及ぼす影響を検討した研究は、既存のマスコミュニケーション理論との明確な対応づけがなされないままに積み重ねられてきたと思われる。これらの研究はマスメディアをリスク認知の重要な一規定因として示すに留まっており、マスコミュニケーション諸理論との関連性についての考察がそれほど行われておらず、その結果としてこれらの研究はマスコミュニケーション理論の発展に直接的に結びつく

ことが困難である。

本稿の目的は、リスク認知研究とメディア効果理論との接点を探ることである。そのためにまず、マスメディアとリスク認知に関する先行研究を概観し、本稿におけるリスク認知の定義を定める。そのうえでマスコミュニケーションに関する諸研究におけるリスク認知研究の位置づけを明らかにし、今後の展望について考察する。

2. マスメディアとリスク認知に関する研究

リスクは様々な学問領域において研究されており、リスクの概念定義もそのため学問領域により異なっていたが、リスクを一般的に定義づける試みも行われるようになってきた (池田・盛岡, 1993)。リスク (risk) の定義には二通りある。すなわち、リスクは、「危険なことがら」そのものを指すものとして (井上, 1994; 加藤・才津, 1997; 岡本, 1992)、あるいは、「事象の発生の不確かさの程度または確率」及び「望ましくない結果の大きさの程度」という2側面を持つものとして (池田・盛岡, 1993; 井上, 1994; 加藤・才津, 1997; 楠見, 1994; 中西, 1995; 岡本, 1992)、定義される。

以下ではマスメディアとリスク認知との関係を検討した研究を、「risk」という言葉を明示的に使っている研究

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程 (社会心理学)

に限定して概観する。ただし、危険な事象そのものをリスクとしている研究はここでは扱わない。

Aust & Zillmann (1996) は、リスク (risk) の知覚・信念へのニュース放送の影響を、イグゼンプラー (exemplar) の条件、すなわち、イグゼンプラーのない条件、感情的でないイグゼンプラー条件、動揺したイグゼンプラー条件を操作して検討した²。イグゼンプラーとは、Zillmann, Gibson, Sundar & Perkins (1996) によれば、ある特定の社会現象の範疇に入りこの現象の特性をある程度示すケースの描写、または個々の出来事の明細な記述である。Zillmann et al. (1996) は、非典型的なイグゼンプラーの集合は特定の社会現象についての知覚や信念を歪めることを見出されていると指摘している。たとえば、ある事故にあったときの犠牲の程度は平均的には骨折程度であっても、メディアに登場するケースがそのような事故に遭って死亡したケースばかりであれば、その事故はより深刻なものであると見なされるかもしれない。Aust & Zillmann (1996) においては、リスクは、「あなたが個人的に食中毒 (拳銃の暴力) の犠牲者となる見込みはどのくらいですか?」という質問に、11 点尺度により回答してもらうことによって測定されていた。実験の結果、操作による主効果が見られ、犠牲者イグゼンプラーのない条件よりも動揺した犠牲者イグゼンプラー条件において有意にリスクが高く回答された。

Gunter & Wober (1983) では、個人的リスク (personal risk) という用語を用い、生命の危険が「心配するには低すぎる」か、「心配するのに十分なほど高い」かを尋ねた。彼らは 1 週間に視聴した番組数によって回答者を軽視聴者、中視聴者、重視聴者に分割し、それぞれにおいて個人的リスクを高く見積もったパーセンテージを比較した。その結果、有意差の見られた 4 つのハザードのうち、雷、洪水、テロリストによる爆弾攻撃においては重視聴者が個人的リスクを高く見積もったパーセンテージが最も高かったが、ガンでは中視聴者で最もパーセンテージが高かった。

Coleman (1993) は、リスク判断 (risk judgment) を、個人的リスク判断、社会的リスク判断に分けて測定した。それぞれは、「あなたの健康が以下の問題 (心臓病、ラドン、など) に影響を受ける見込みはどのくらいだと思いますか?」、「以下の問題が将来わが国にとって非常に深刻な問題となる見込みはどのくらいだと思いますか?」という質問への、6 点尺度での回答で測定された。社会的リスク判断は自発的 (心臓病、喫煙、エイズについてのリスク判断)、非自発的 (食べ物、クリーナー、ラ

ドン、水についてのリスク判断) の次元に分かれた。そして、情報獲得のためのマスメディアの利用度などに関する質問項目への回答の因子分析の結果用いられた 5 つの尺度のうち、個人的リスクにはテレビニュースが、社会的リスク (自発的) には新聞ニュースが、社会的リスク (非自発的) には科学情報が、それぞれ有意な影響を及ぼしていたことを見出した。

Berger (1998) はニュースレポートが人々の、犠牲者となるリスク (victimization risk) の見込みに及ぼす影響について検討した。Berger (1998) は犠牲者となるリスクを測定するために、11 点尺度を用い、回答者にある脅威の犠牲者となる見込みについて見積もることを求め、ある脅威が増加しているというニュースと共に同時期に人口も比例して増加しているというデータを提示するかどうかと、ジェンダーが、犠牲者となるリスクの知覚に影響を与えるかどうかを検討した。2 つの実験の結果、ジェンダーのみが犠牲者となるリスクに影響を与えていることを見出された。

Tyler & Cook (1984) は、impersonal impact hypothesis について紹介している。この仮説によれば、メディアのインパクトは、一般的な問題の重要性や頻度についての社会的レベルでの判断では生じるが、個人的なリスクについての判断に関しては生じない。そして Tyler & Cook (1984) は、社会的レベルの判断と個人的レベルの判断を次のように明確に定義した。まず、社会的レベルの判断 (societal level judgments) とは、何らかの社会現象 (例: 犯罪) に対する、より広いコミュニティとコミュニティの住人の状態についての信念について言及している。これらの判断は、近所における犯罪の心配のような指標によって、あるいは見積もられた犯罪率によって、測定される。そして、個人的レベルの判断 (personal level judgments) は、犠牲となること、回答者自身の見積もられたリスクについて言及している。それらは攻撃される又は盗まれることについて見積もられたリスクのような指標によって、あるいは家から 1 マイル以内を歩くのが恐ろしい程度によって測定される。Tyler & Cook (1984) が行った 3 つの研究のうち、研究 1・3 がメディアのリスク認知へのインパクトに関するものであったが、ホームヘルスケアプログラムでの問題についてのリスク判断を求めた研究 1、火器の使用、火事、飲酒運転、ガンについての判断を求めた研究 3 の両方において、社会的レベルの判断のみでマスメディアの影響が見られることを見出された。

以上の研究においては、リスク認知あるいはリスク判

断は、個人レベルでは主として何らかの危害が自分に生じる見込み（主としてリッカート尺度またはパーセンテージによる測定）として測定されている。前述のリスクの定義と対応づけて見ると、「望ましくない結果」が何らかの危害、「確率」が自分にそれが生じる確率にそれぞれ対応しており、リスク認知は「望ましくない結果」が自分に生じる「確率」に関する見積もりとして測定されている。また、研究によってはリスク判断という言葉が用いられているが、リスク認知と同様、リスクの見積もりが測定されている。ただし Gunter & Wober (1983) においては知覚されたリスクは生命の危険への心配 (worry) として測定され、Tyler & Cook (1984) においては見積もりに加えて心配 (concern) という要素をも含むものとして定義されており、「リスク」の用いられ方は全く統一というわけではない。また、社会レベルにおけるリスク認知とリスクの定義との対応は、より不明瞭である。社会レベルでのリスクの判断は Coleman (1993) においては将来問題が深刻になる見込みとして、Tyler & Cook (1984) においては問題の深刻さや対処の重要性として測定されている。また、「望ましくない結果」は研究によって様々であり、主として自分が生命または健康を害すること、または深刻な社会問題となることが望ましくない結果として用いられている。

以降では、上記の先行研究において比較的共通して見られた用いられ方であった、望ましくない結果が生じる見込みの見積もりをリスク認知とする。

3. メディア効果理論とリスク認知との関連性

リスクに関する研究のなかでもリスク認知は主として社会心理学において研究されている。リスク認知における楽観主義的バイアス (optimistic bias, unrealistic optimism) とは、ネガティブな出来事を経験する見込み (likelihood) または可能性 (probability) を過度に少なく見積もるといふ現象を指す (Weinstein & Klein, 1996)。ここでのリスク認知の定義は前節におけるリスク認知の定義と同一である³。以降ではリスク認知とメディア効果理論、特に培養理論と第三者効果研究との関わりについて述べ、社会心理学におけるリスク認知研究との接点を述べる。

1) 培養理論

培養理論とはテレビが視聴者の現実認識に及ぼす長期的・累積的影響を探ろうとするものである (斉藤, 1992)。培養分析ではテレビは社会における現実や規範、価値を培養するという想定が検討される (Gerbner

& Gross, 1976)。Gerbner & Gross (1976) は培養効果分析の一環として、「ある一週間のあいだに、あなたが何らかのタイプの暴力に巻き込まれる機会はどのくらいですか? 10回に1回(テレビよりの回答: テレビの世界と一致する、暴力の過度の見積もり)ですか、それとも100回に1回ですか?」という質問項目を設けた。全ての回答者のうち、重視聴者(一日平均4時間以上視聴している人)は52%が「テレビよりの回答」をしたのに対し、軽視聴者(一日平均2時間以下視聴している人)は39%であった。この傾向は教育、ニュース購読、年齢、ジェンダー内でも、同じ傾向(重視聴者のほうがテレビ回答をする)が見られた。

培養効果研究においてしばしば取り上げられるこのような見積もりは、第一次信念と呼ばれている。Hawkins & Pingree (1990) によれば、第一次信念とは、出来事の頻度、可能性、又は特徴描写の見積もりである。即ち、実世界とテレビの世界における暴力犯罪の頻度が測定され、回答者の見積もりとこれらの2つの測定尺度を比較することができる。第二次信念とは、例えば一人で歩くことへの恐れあるいは見知らぬ人への不信のようなものであり、テレビ内容における量化的指示物を持たない。しかし、見知らぬ人との暴力の優劣さは、見知らぬ人を恐れ、信じないことを含むと論じられ得る。第一次培養効果とは知覚レベルでの培養効果で、第二次培養効果とは信念・価値観レベルでの培養効果である (斉藤, 1992)。そして、Hawkins & Pingree (1990) によれば、テレビ視聴と第一次信念との相関は、第二次信念との相関よりも頑健であり、第三の変数のコントロールにより影響されない。

培養効果研究において中心的に検討されている暴力についての第一次信念は、望ましくない結果(暴力に巻き込まれること)の見積もりであり、リスク認知と同一の測定内容であると思われる。つまり、前述のようにリスク認知を定義するならば、マスコミュニケーション研究においてリスク認知は、培養効果を測定するための一変数として、メディア効果研究において古くから扱われてきたことになる。そして、暴力についての第一次信念への支持は、テレビのリスク認知への影響の存在への支持となる。

マスメディアのリスク認知への影響に関する研究は培養効果において測定される社会的リアリティの細分化に関する問題に何らかの示唆を与えるかもしれない。また、結果の望ましくなさが認知におけるバイアスに重要な役割を果たすことを示すリスク認知研究は、テレビ視

聴の社会的リアリティの知覚への影響についての理解を助け得るだろう。

同時に、社会心理学におけるリスク認知研究の知見は、培養理論に対する批判点を克服する助けとなるかもしれない。培養効果分析においてはガーブナーの知見を確認する研究と知見の再現に失敗した研究とがあらわれ論争が交わされることになった(水野, 1991)。そのような論争における批判点を整理したうえで斉藤(1992)は、培養理論に今後の課題として、因果関係の特定、培養理論の枠組の中での視聴者のメッセージ解釈の問題、あるいは心理学的メカニズムの解明の必要性を挙げている。心理学的メカニズムの解明の必要性に関して、斉藤(1992)は、培養理論の弱点として目につくのは、培養効果がどのような過程を経て生じるのか、その心理学的メカニズムの説明が欠如している点であると指摘している。培養理論がテレビ視聴と現実認識の関係を扱うものである以上、この二つの概念がどのように論理的に結びついているのかに関する説明は本来不可欠なものであり、培養効果の基盤にある心理的プロセスの解明は培養理論をより説得力のあるものにするために不可欠な課題であろうと斉藤(1992)は述べている。リスク認知への影響が培養効果の一環であれば、培養理論研究において繰り返し指摘される心理的プロセス解明の必要性(Hawkins & Pingree, 1990; 斉藤, 1992; Shrum, 1995)は、リスク認知過程の検討が培養効果の解明に結びつき得ることを示すものである。また、培養効果の検討対象の拡大において、どのような問題に関して培養効果がどの程度見られ、それはどのような要因によるものであるかは、リスク認知に注目することによってより明確なものとなるだろう。培養理論に関してはこれまでに数多くの研究・論争がなされており、培養理論とリスク認知との関係を把握するためには、これらをより綿密に検討することが望まれるだろう。

2) 第三者効果研究

Davidson (1983) は、人々は、マスコミュニケーションの他者の態度や行動への影響を、過大に見積もる傾向にあるだろうと予測する。そしてこれらの個人がこのコミュニケーションが他者に対して持つと予期するインパクトは、彼らに、何らかの行為を取ることを導くかもしれない。このうち前者の傾向、すなわち他者への影響を過大に見積もる傾向の説明として、このような効果は部分的にはリスク認知研究からの知見から説明され得ることが指摘されている。以下では第三者効果とリスク認知研究との関わりについて明確に記しかつ特に直接的な検

討を試みているいくつかの研究例について述べる。ただし行動レベルにおける第三者効果に関してはここでは触れていない。

Gunther & Mundy (1993) は、第三者効果研究においては、オーディエンスにとって有害な結果を持つ可能性のあるメッセージが共通の要素であると指摘し、リスク認知において見られる楽観主義的バイアスに関する知見から、メッセージの利益の見込みが第三者知覚の有無を決定すると推測した。結果はこの推測を支持した。人々は、そのトピックはほとんど利益がない、あるいはオーディエンスにとって有害な結果の可能性さえある(すなわち、メッセージに影響されることが望ましくない結果である)と感じるとき、自分自身を他者よりも賢く、メッセージにより抵抗できると考える(すなわち、楽観主義的バイアスが生じる)傾向にあるが、メッセージからの潜在的な利益が高いならば、人々は他者と同程度影響を受けると考えることが、この結果から指摘された。

Brosius & Engel (1996) は第三者効果の心理的基盤として、楽観主義的バイアス、前出の Tyler & Cook (1984) の impersonal impact hypothesis, メディアの影響に対する一般的なネガティブな態度を想定した。結果は影響されることによるベネフィットの見込みと自己と他者の心理的距離が第三者効果の大きさ又は有無に影響を与えていることを部分的に示し、リスク認知過程におけるバイアスが第三者効果の基盤として作用していることへの支持を見出した。またメディアの影響の知覚されたネガティブさは第三者効果に弱い影響を与えていた。

Shah, Faber & Youn (1999) はリスク認知文献を1つの手がかりとして、自分や他者のメディアの影響の受けやすさの知覚と、自分や他者のメディアによって受ける影響の深刻さが区別され、それぞれにおいて第三者効果が生じると仮定した。調査の結果はこの仮定を支持した。

Chapin (2000) は、第三者効果の文献は楽観主義的バイアスが知覚のバイアスの基底をなすメカニズムであることを示唆しながらその想定はテストされていないとし、第三者知覚と楽観主義的バイアスを同時に検討することを試みた。調査の結果、楽観主義的な学生(「他の人と比べて私はエイズにかかりにくい」)はエイズに関する safer-sex メッセージは他者より自分自身に大きく影響すると考えており、悲観主義的な学生はその逆であった。Chapin (2000) は結果を考察し、楽観主義的バイアスが第三者知覚の基底をなすメカニズムであるという想

定を支持していないと結論づけている。しかしこの研究において楽観主義的バイアスは、エイズに罹るリスクに関して測定されている。しかし、楽観主義的バイアスが第三者効果を説明するとすれば、第三者効果研究で測定されているのは自分及び他者がメディアに影響を受ける見込みの見積もりである。従って、第三者効果の基底メカニズムとして楽観主義的バイアスを採用するならば、「エイズにかかる見込み」における自己と他者の差異ではなくて、むしろ「メディアに影響を受ける見込み」における自己と他者の差異が検討対象としてより適切であると思われる。リスクの定義から解釈するならば「望ましくない結果」は「メディアに影響を受ける」ことであり、リスク認知はメディアに望ましくない影響を受ける見込みの見積もりである。さらに、Chapin (2000) も指摘しているように、この研究におけるメッセージは向社会的メッセージであった。一般に第三者効果が生じるための条件とされているのはメッセージが望ましくないものであるということである (Gunther & Mundy, 1993; Perloff, 1993; Brosius & Engel, 1996)。つまり、それによって影響を受けるのが望ましくないと知覚されるメッセージにおいて、第三者効果はより明白に生じる。従って Chapin (2000) の結果からは第三者効果と楽観主義的バイアスとの関わりの可能性は小さくならないだろう。

仮にリスク認知における楽観主義的バイアスが第三者効果を部分的に説明し得るものであるならば、リスク認知過程の究明は第三者効果研究発展の助けとなるかもしれない。また、それと同時に、第三者効果研究はリスク研究への示唆を持つだろう。例えば Shah et al. (1999) の研究は、リスクの定義と対応づければ、これまで検討されてこなかったリスクの構成要素、すなわち結果の重大さの効果を検討した研究と見なされ、リスク認知において、結果が生じる見込みに加えてその結果の大きさの知覚においても自己と他者における見積もりの差異が見られるかもしれないという示唆をもたらしている。

3) その他

前述の Aust & Zillmann (1996) はニュース放送におけるイグゼンプラーの条件の操作が回答者のリスク認知に影響を与えることを見出した。また、Gibson & Zillmann (1994) は、カージャックに関するニュース報告におけるベースレート情報の正確さ (カージャックの犠牲者のうち身体的負傷のない犠牲者、軽度の負傷の犠牲者、重度の負傷の犠牲者、殺された犠牲者の各割合をパーセンテージで提示する条件、または「ほとんど」「何

人か」などあいまいな言葉で提示する条件) とイグゼンプラーの歪み (深刻さを誇張している程度) を操作し、イグゼンプラーの歪みはカージャックがどの程度深刻な全国問題であると思うかにおいては有意な影響を与えたが、個人にとってのリスク認知 (自分がカージャックの犠牲となる見込み) においては有意な結果が得られなかったことを報告した。Gibson & Zillmann (1994) はこの結果を、楽観主義的バイアスから解釈している。

テレビドラマにおける暴力の優勢さと同様、ニュースは日々、「望ましくない結果」、すなわち、被るのが望ましくないと知覚されるであろう出来事を報道する。Stone & Grusin (1984) は、3つの主要なネットワーク、ABC, CBS, NBC において、ある一週間の平日の夕方のニュース放送で報じられているニュースのうち、25.1% がグッドニュース (テネシー州メンフィスエリアに住む人の大多数がポジティブまたは明るいと感じるであろうニュース) であったのに対して 46.8% がバッドニュース (グッドニュースの反対、ネガティブまたは憂鬱) であったことを示し、テレビニュースにおけるバッドニュースの優勢さを見出した。また、Stone, Hartung & Jensen (1987) は、3つのローカル TV の夕方のニュース放送においてもグッドニュースよりバッドニュースの方が多かった (グッドニュース: 全体の33%, バッドニュース: 43%) ことを見出している。バッドニュースを多く報道するという傾向が日本でも見られるならば、日本においてもニュースで報道される社会事象の多くが「望ましくない結果」であることになる。そうであるとすれば、望ましくない社会事象についてのニュース報道の受け手への知覚を検討することは、現実の報道内容に即した意味のある検討であるだろう。

4. おわりに

本稿ではメディア効果諸理論とリスク認知との関連について検討することを試みた。

リスク認知とマスメディアに関するこれまでの研究では、マスメディアはリスク認知に影響を及ぼす要因の一つとして検討されており、マスコミュニケーション理論とリスク認知との関わりに関する検討はそれほど行われていなかった。リスク認知の概念定義について整理しリスク認知とメディア効果理論との関わりについて概観した結果、リスク認知はマスメディア効果研究において個別に検討されてきた複数の問題と同時に関わっていた。また、マスコミュニケーション研究においてリスク認知は、近年になってリスクが脚光を浴びるようになった結

果として扱われはじめた新しい特殊なトピックではなく、二十年以上前から取り上げられてきた研究対象の一つであった。

ここで概観した諸研究の関わり、及びこれらの研究とリスク認知との関わりを、今後さらに詳細に検討することが期待されるだろう。特に検討が望まれると思われる点として、「望ましくない結果」についての検討が挙げられる。マスコミュニケーションとリスク認知に関して検討した研究においては病気や災害、犯罪など、誰もにとって等しく望ましくないことが暗黙に想定され得るような事象である、生命や健康を脅かす出来事を対象として研究が行われていた。しかし、望ましくない結果は必ずしもこのような事象に限定される必要はなく、リスク認知バイアスは生命や健康を害する事象のみに働くものではないことは、第三者効果研究からも示される。望ましくない結果とはどのような結果なのか、望ましくない結果の性質の違いはリスク認知にどのように影響するかなどの検討が必要であると思われる。

それと同時に、リスク認知過程研究の発展は、リスク認知と関わりを持つマスメディア研究の発展に結びつくことが期待されるだろう。リスク認知過程におけるバイアスに関する研究は、マスメディアとリスク認知との関わりを明らかにすることがマスコミュニケーション研究にとって有意義であることを示している。なぜならば、メディア接触の結果として生じたリスク認知の変化がメディアの内容の影響によるものであるのか、それともそれらを処理する内的な過程において生じるバイアスによるものであるのかを区別することは、研究を洗練させる上で必要となると思われるからである。リスク認知と関わりを持つマスコミュニケーション研究を区別し、それらの研究にリスク認知過程研究の成果を取り入れることは、それらの研究の今後の発展にとって重要である。

注

¹ risk perception の文字通りの訳語はリスク知覚であるが多くの場合リスク認知と邦訳されることが多い(広瀬, 1993)。本稿においても risk perception を、リスク認知と呼ぶことにする。

² Aust & Zillmann (1996) の実験における変数名では risk は personal danger となっている。

³ 必ずしも全ての研究において測定方法が同一というわけではない(e.g. Weinstein, 1980)。

引用文献

Aust, C. F. & Zillman, D. (1996) Effects of victim exemplification in television news on viewer perception of social issues. *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 73,

787-803.

Berger, C. R. (1998) Processing quantitative data about risk and threat in news reports. *Journal of Communication*, 48(3), 87-106.

Brosius, H. & Engel, D. (1996) The causes of third-person effects: Unrealistic optimism, impersonal impact, or generalized negative attitudes towards media influence? *International Journal of Public Opinion Research*, 8, 142-162.

Chapin, J. R. (2000) Third-person perception and optimistic bias among urban minority at-risk youth. *Communication Research*, 27, 51-81.

Coleman, C. (1993) The influence of mass media and interpersonal communication on societal and personal risk judgments. *Communication Research*, 20, 611-628.

Davidson, W. P. (1983) The third-person effect in communication. *Public Opinion Quarterly*, 47, 1-15.

Gerbner, G. & Gross, L. (1976) Living with television: The violence profile. *Journal of Communication*, 26(2), 173-199.

Gibson, R. & Zillmann, D. (1994) Exaggerated versus representative exemplification in news reports: Perception of issues and personal consequences. *Communication Research*, 21, 603-624.

Gunther, A. C. & Mundy, P. (1993) Biased optimism and the third-person effect. *Journalism Quarterly*, 70, 58-67.

Gunter, B. & Wober, M. (1983) Television viewing and public perceptions of hazards to life. *Journal of Environmental Psychology*, 3, 325-335.

Hawkins, R. P. & Pingree, S. (1990) Divergent psychological processes in constructing social reality from mass media content. In N. Signorielli & M. Morgan (Eds.), *Cultivation analysis: New directions in media effects research*. Sage, pp. 35-50.

広瀬弘忠 (1993) リスク・パーセプション 日本リスク研究学会誌, 5, 78-81.

池田三郎・盛岡 通 (1993) リスクの学際的定義(高度技術社会のリスク) 日本リスク研究学会誌, 5, 14-17.

井上すみれ (1994) リスク知覚に及ぼすマス・メディア及び個人属性要因の影響研究 慶應義塾大学社会学研究科博士論文

加藤和明・才津芳昭 (1997) リスクの概念—概念規定の現状とその本質に関する考察— 日本リスク研究学会誌, 9, 87-94.

吉川暉子 (1999) リスク・コミュニケーション—相互理解とよりよい意思決定をめざして— 福村出版

楠見 孝 (1994) 不確実事象の認知と決定における個人差 心理学評論, 37, 337-356.

水野博介 (1991) 文化指標研究と涵養効果分析—そのアイデア・発展・現状と評価— 新聞学評論, 40, 274-290.

水嶋友昭・林理 (1995) 原子炉開発専門家と一般人のリスク認知の差異 実験社会心理学研究, 35, 178-184.

中西準子 (1995) 環境リスク論—技術論からみた政策提言— 岩波書店

岡本浩一 (1992) リスク心理学入門—ヒューマン・エラーとリスク・イメージ— サイエンス社

Perloff, R. M. (1993) Third-person effect research 1983-1992: A review and synthesis. *International Journal of Public Opinion Research*, 5, 167-184.

齊藤慎一 (1992) 培養理論再考 新聞学評論, 41, 170-183.

Shah, D. V., Faber, R. J. & Youn, S. (1999) Susceptibility and severity: Perceptual dimensions underlying the third-

- person effect. *Communication Research*, 26, 240-267.
- Shrum, L. J. (1995) Assessing the social influence of television: A social cognition perspective on cultivation effects. *Communication Research*, 22, 402-429.
- Stone, G. C. & Grusin, E. (1984) Network TV as the bad news bearer. *Journalism Quarterly*, 61, 517-523, 592.
- Stone, G., Hartung, B. & Jensen, D. (1987) Local TV news and the good-bad dyad. *Journalism Quarterly*, 64, 37-44.
- Tyler, T. R. & Cook, F. L. (1984) The mass media and judgments of risk: Distinguishing impact on personal and societal level judgments. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 693-708.
- Weinstein, N. D. (1980) Unrealistic optimism about future life events. *Journal of Personality and Social Personality*, 39, 806-820.
- Weinstein, N. D. & Klein, W. M. (1996) Unrealistic optimism: Present and future. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 15, 1-8.
- Zillmann, D., Gibson, R., Sundar, S. S., & Perkins Jr., J. W. (1996) Effects of exemplification in news reports on the perception of social issues. *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 73, 427-444.